

「佐原真氏と考古学」を聴いて

聴講日：H29.7.1
むきばんだやよい塾第18期

佐原先生は、妻木晩田遺跡の保護運動を熱心に応援されていました。保護が決まり、活用に目途が立ち出した2002年にお亡くなりになりました。一緒のお仕事をされて、身近で佐原先生を見てきた工楽先生にその思い出をお話しいただきました。

1. 紫雲出山遺跡の黒斑土器

奈良文化財研究所(奈文研)は、1964年に平城宮跡の発掘を開始するのに際してこの年に19人という大量採用をしましたが、その中に佐原先生や、工楽先生、横山浩一氏らがおりました。佐原先生は、奈文研に勤務する一方で紫雲出山遺跡の発掘報告書の作成も並行して行っていました。この遺跡からは黒斑のある壺型土器が出土しており、黒斑は土器を焼成する過程で生成されるものと考えられていました。佐原先生は、この黒斑土器を詳細に観察することによってこの黒斑が、焼成時ではなく、焼成後に土器を取り出すときに取出し棒などが燃えて出たススが付着することによって形成されることを見つけました。

2. 縄文時代には戦争はなかった

紫雲出山遺跡からは石製の矢じり(石鏃)もたくさん出土しています。佐原先生はこれらの石鏃の重さを携帯する竿ばかりで一つ一つ計測したデータから、弥生時代の石鏃はそれ以前の石鏃に比べてサイズも大型化し、重さも増大していることに着目しました。これは、縄文時代までの石鏃が主に狩猟などの動物を射止めるための道具であったが、弥生時代には対人に用いる戦闘用具として殺傷能力の向上が求められたためだと解釈しました。これは、人類は本能として戦闘性を有しているのではなく、富の蓄積や対外交渉などの外的要因によって後天的に戦争を行うようになったことの証しと捉えました。だから人類は外的要因さえを取り除ければ、平和に生存していけるのだと言う主張を展開しました。

3. ‘モノ’の詳しい観察結果から

上述してきたように佐原先生は山内清男氏や小林行雄氏の教示を受けて、自らも工夫を重ね、出土した遺物をよく観察して、そこから当時の社会の様子や実態を推測することで研究を進めてきました。河出書房から出版された日本考古学講座に佐原先生の指導を受けて工楽先生が作成された弥生前期の壺の変遷様式図が掲載されていますが、これもその一例と言えます。

この時代の土器には、頸部と胴部或いは頸部から肩部にかけてへらがきされた沈線で仕切りとしたり、或いは段で、或いは削り出しで形成された突帯で、或いは貼り付けで形成された突帯で仕切りとしたりで、時代により変化しています。このことから壺全体の出土がなくても、この部分の仕切りの模様を詳しく観察すれば土器の作成年代を特定できるようになりました。

4. 考古学を分かり易く

佐原先生は伊丹市史の編纂にも携わりました。ある時まとめられた資料を読んだ伊丹市の担当者から、‘書かれている内容が難しくてわからない’と言われたそうですが、それは知識が浅いからだ一蹴しました。しかし‘多少とも関わりのある担当者が読んで分からないのだから、一般市民はなおさら分からないでしょう’と反論され、愕然としたそうです。以来、佐原先生は考古学をできるだけ優しく分かり易いことばで表現することに努めてこられたそうです。ご自身の名前をサインされるときも、戸籍にある‘眞’の字から‘真’に変えられたと言うことです。

5.考古学を世界史の観点から

近年、日本考古学の水準は高まってきましたが、海外への発信は十分なものではありませんでした。佐原先生は、日本の先史時代が世界史の中でどう位置付けられるかを得意の語学力を活かしてアピールすることにも積極的でした。世界史という広い視野から日本の考古学を捉える研究を進められていました。戦後まもなくの頃に江上波夫氏が騎馬民族征服王朝説を唱えられました。戦前の皇国史観から解放されて、考古学の成果を論拠として唱えられたこの説は多くの賛同を得て一世風靡しました。偉大な先達者である江上氏に対して、佐原先生は臆せず論戦を挑み、同じ考古学の資料を用いてこの説が解釈として受け入れられないことを実証されたのも、世界史という広い視野から考古学を考えた結果と言えるでしょう。

近い過去の日本の過ちに対しても深い関心を持たれていました。人間が持っている戦闘性は先天性のものではないことを矢じりの研究から確信していました。だから人間は戦争を放棄することは決して困難なことではないと発信され続けていました。70歳での永眠はその思い半ばのことだったかも知れません。

「弥生時代の木工と漆芸」を聴いて

青谷上寺地遺跡からは大量の木製品が出土していますが、表面に漆が塗られた極めて装飾性の高いものも出土しています。これらの漆は、植物のウルシの幹に鋭い刃物で傷を付け、そこからしみ出してくる樹液を採集したものが用いられます。青谷上寺地遺跡の周辺にはほかの広葉樹に交じってウルシの木が自生していたようです。

漆が塗られた上等な木製品に施された模様は、日本海に面した海上交流によって形成されたものと思われれます。木製品以外の出土物である鉄器や占いの骨やヒスイなどからも、韓国も含めた海上交流の存在を示しており、漆製品もそれを補強しています。

漸江省河婦渡には、六、七千年前の漆器と漆塗り土器があることなどから、漆塗りの技法は中国から日本列島に伝えられたと考えられてきました。しかし、最近列島の西、東や北海道でも古い漆が見つかることから日本起源である可能性が出てきています。漆工芸の起源が中国か、日本かまだ定かではありませんが、DNA解析などでもできるそうなので、明らかにされる日も近いでしょう。

山形県東置賜郡高島町押出遺跡から出土した縄文時代前期の漆製品には、底の部分に細い線模様が施されていますが、極めて細い線が何本も並行して描かれています。このような線模様を形成するには、細くて柔軟で丈夫な筆がなくてはなりません、現代の漆職人にも難しい非常に高い技術であるそうです。

漆工芸における素地技法と加飾技法

素地技法	木胎	素地材として木材を用いたもので、指物・挽物・曲物・割物に大別される。
	籃胎	竹ヒゴを編み、成型した籠を素地とし、それに漆塗りの手法を加えたもの。竹材は弾性に富み、曲げに強い。また物差しに使用されているように温湿度の変化による狂いが極めて少ないため、薄くて軽くできるのが特徴。
	巻胎 夾紵	木材を柱目にそって割って作った薄板を螺旋状に巻き上げて作った器物。 麻布を漆ではさむように貼りあわせて造形する方法。
加飾技法	螺鈿	貝の真珠層を切り抜き、文様とする技法。螺鈿に使用される貝は鮑や夜行貝、他にも白蝶貝、黒蝶貝、メキシコ鮑、などがあり、加工法により厚貝、薄貝に分類できる。また中には貝の裏面に金、銀箔を貼ったものや彩色したものがあり、彩切貝として用いられる。
	蒔絵	日本独特の技法。漆液で文様を描き、漆が乾固する前に金・銀粉を蒔きつけることから名付けられた。蒔きつけた紋様部分を粉固めして磨いただけの「平蒔絵」、粉蒔き後に全体を塗り込めた後、文様が現れるまで平滑に研ぐ「研出蒔絵」、またあらかじめ漆・錆下地・炭粉等で肉上げしてレリーフ状に文様を表す「高蒔絵」がある。
	象嵌	貝を下地に貼ってから漆で塗り込める塗込法と、文様部分を彫り下げて貝を嵌める彫込法がある。